

## MINDS (ミレニアム開発目標)

森 壮也

最近、フィリピンのミンダナオ島で現地調査を行った。同島の少し大きな町とそこからさらに奥地の小さな町で障害当事者の人たちの訪問調査を行った。狭い路地の奥の、普段、なかなか見ることのない人たちの暮らしを見せて頂き、お話をうかがった。そうした中で三つのIについて考えさせられた。最初のIは、自立 Independence

である。障害者の自立といった時に日本では誰の助けも借りず、ひとりで全てのことができることという非常に狭い意味の場合がある。しかし、最重度の人たちにとつては、これでは永久に自立には到達できず、突き放されたも同然である。また耳が聞こえないろうの人たちを考えてみれば、手話を知らない耳の聞こえる聴者の人たちとのコミュニケーションは、いつまでたっても身ぶりで、やはりほとんど意味がない。しかし、自立ということばは、障害者の生活実態に即して考えれば、自己決定ができることであるべきだろう。自分の生活・行動を自分の意思で決定し、実現できることである。障害を持つていても、この意味での自立は十分に可能である。途上国でもそうした自立を実現するための支援は可能である。しかし、首都マニラに比べると保守的なミンダナオの文化は、それはそれで古き

良きフィリピンの伝統という面もあるが、ろう者をはじめとした障害者に自立を許さない結果となっている。例えば、彼らの独立率は異常に高い。障害者の多くに職がなく、自立できていないとして親たちは彼らの結婚を許さない。この結果、多くの障害者が独身のまま人生を過ごすこととなる。フィリピンの大家族制度も彼らにとつては、自分を支えてくれる子供を自分で産み、育てることも叶わない制度でしかない。

二番目のIは、Illiterateである。非識字と訳されることばは、障害者にとつては日常のものである。フィリピンの基礎教育は、識字率が八四・一〇％(二〇〇三年)という状況から、他の途上国よりは比較的良好とされている。しかし、これは、同時に同国での障害者の置かれた状況のいっその困難さを浮き彫りにする。特殊教育を障害者に施す学校の数の少なさ、専門教員の数の少なさ、そうした事情は、マニラのような大都市から離れるとさらなる格差をもつて障害者の状況の悪化の背景となる。ろう者には、地域言語はもちろんのこと、学校で教えているはずとされる簡単な英語の文章ですら、理解できず、訪問調査の質問票を読んでもらうこともかなわず、手話による通訳を経ないと質問も難しかった。

最後のIは、Interpreterである。すでに障害者支援を日本よりもはるか前から進めていた欧米系NGOは、こうした障害者の状況の改善のための処方箋として、障害者自助団体の各地での設立を掲げている。二〇〇六年一二月の国連の障害者の権利条約採択で、全国レベルでの自立団体の設立はかなり進むようになってきたが、地方レベルではこれは非常に難しい。たとえば、ろう者のケースがそうである。障害を持つ人たちの協会を設立しても、地方自治体との間でのコミュニケーションでは、間に手話通訳 Sign Interpreter が必須である。しかし、その手話通訳がない。間をつなぐ人がいなければ、政府の貧困削減政策は彼らには届かない。この隔絶された壁の間での橋渡しは容易な作業ではない。

ミレニアム開発目標は貧困削減を謳い、貧困者の中の障害者にも光が当てられるようになった。しかし、障害者が直面している壁は、この三つのIに象徴されるように、貧困者一般への処方箋だけで解決されるものではない。これをどうするか、しっかりとした現実の分析と併せての政策提言が求められている。

(もり そうや/アジア経済研究所新領域研究センター)